

型押し小史

書物の装丁における型押しの歴史と技術的変遷について

NPO法人 書物の歴史と保存修復に関する研究会
講師 野呂聡子

* 起源(blind tooling /空押し)

1982年に出版され、現在はWeb上で公開されているEterington&Robertsの製本用語集『Bookbinding and the Conservation of books』によると、空押しの技法は7-8世紀のコプト式製本まで遡ることができるという。一方エズデイル著『西洋の書物』(1967)は、表紙への型押しは「8世紀にフルダ派*1の手で初めて知られるようになった手法」と記す。カンプラスの『西洋製本図鑑』(2003)では「空押しという技術は本の歴史よりも古く(中略)もともとはイスラム世界で生まれて広まった技術である」と述べている。

これらの諸説を考え合わせると、型押しの技術はアフリカ北部で生まれ、中世の早い時期に書物の装飾に応用されるようになり、ヨーロッパではとりわけドイツを中心にその技法が活用されたということになりそうだ。しかし他の古い製本様式の起源と同様、記録文書がなく現存する作例から推測するほかない以上、正確なところは分からない。



コプト装の『詩篇』 8世紀 Wikimedia Commonsより

*1 フルダ

プレッサー著『書物の本』で中世の最も重要な写本の流派のひとつとしてその名が挙げられているドイツ中心部の都市。西暦744年、聖ボニファティウスの弟子によって僧院が設立された。ドイツ~オランダ圏への宣教に努めたボニファティウスは僧院設立の10年後、布教途中に殺害されるが、その遺体が埋葬されたフルダ修道院は巡礼の目的地となり、フルダは8-9世紀を通してドイツの文化的・宗教的な中心都市となった。修道院には2000冊余りの手稿が収められ、写本の生産も盛んに行われていた。なお2012年ピューリツァー賞ノンフィクション部門を受賞した『1417年、その一冊が全てを変えた』では、1000年以上忘れられていたルクレティウスの『事物の本質について』が発見されたのはこのフルダ修道院においてであったと推測されている。

以下のサイトではフルダが位置するヘッセン州で1890年に開催された、ヘッセン歴史博覧会の書籍部門の図録が公開されており、11世紀から18世紀までの様々な製本・装丁様式を50枚以上の鮮明な画像で辿ることができる。

<https://bookbinding.com/hessian-bookbindings/>

調査の結果、展示品はヘッセンで製本されたものではない本の方が多かったとのことだが、各展示品の素材や製本の詳細な情報が記載されており、充実した図録となっている。

中世の豪華絢爛な書物に施されていた装丁に比べれば、型押しは遥かに安価で量産も可能であり、簡便な装飾技法であると言える。とはいえそれはクロワゾネ(有線七宝)やシャンルベ(彫金七宝)、革象嵌、革彫刻などの一点ものの工芸作品のような装丁と比べての話であり、小さな花型やパレットを熱しては押し、また熱しては押し、それを繰り返して表紙全体を覆う模様を描くのが依然として大変な手間であったことは想像に難くない。

15世紀半ばの活版印刷誕生後は書物の数が飛躍的に増加したのに伴い、製本にかかる手間の軽減が図られた。装丁の面でこれに貢献したのがロールとパネル・スタンプである。

* ロール(ルレット、型押し車)

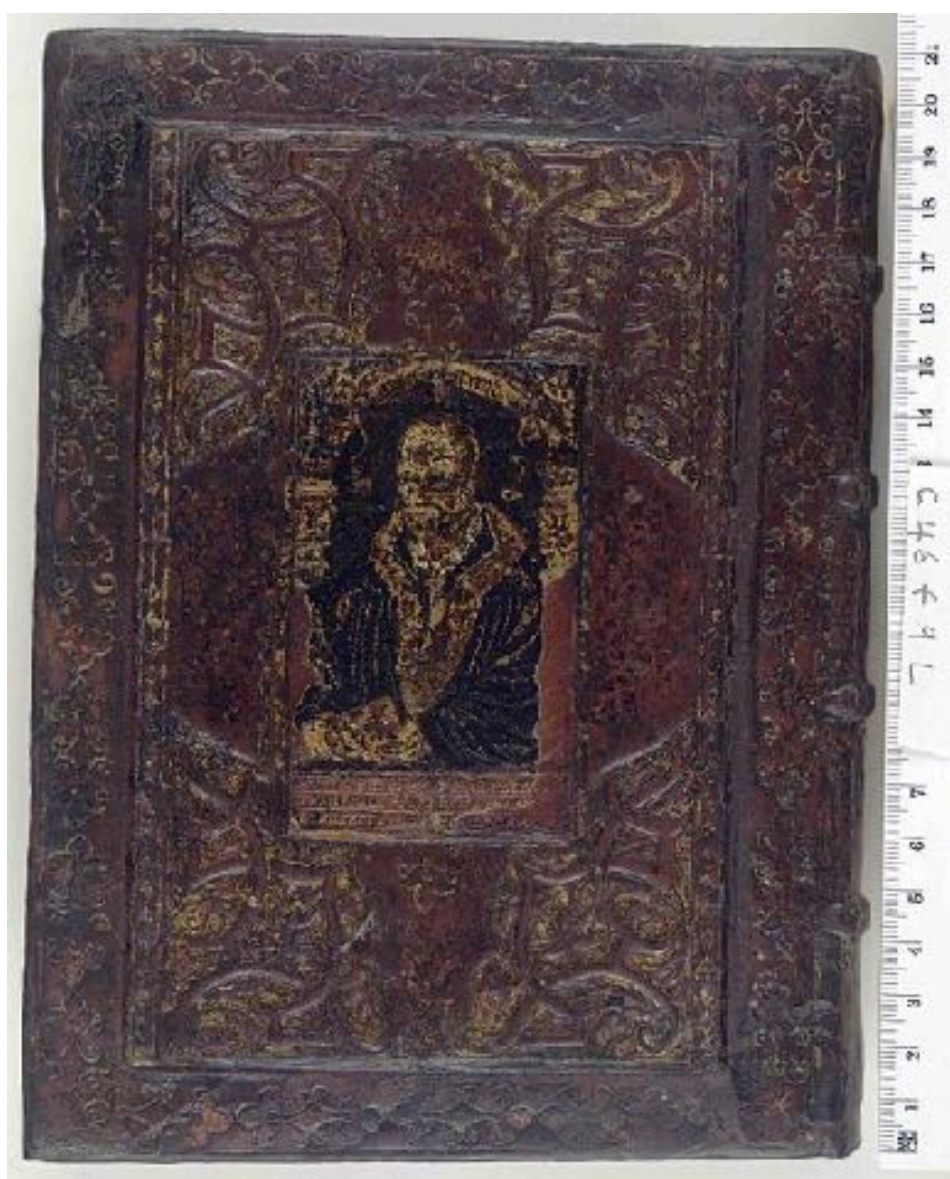
図柄が彫られた円筒形の押し型。回転させることで連続した模様を描き出す。

ドイツでは遅くとも1460年代から用いられており、その後半世紀ほどの間に各地で使われるようになった。時代が下ると1回転で30cmの長さまで型押しできるものが登場するが、初期のロールは直径がより小さく、1回転で型押しできる長さは13cm~15cmほどだった。同じ方式で図柄のない直線や曲線を描くフィレ(筋型)も同時期に開発されたものと考えられている。

* パネル・スタンプ

小さな型を組み合わせて模様を作る従来の型押しに対し、比較的大きな陰刻の版(多くは金属製)を使って表紙に型押しを施す技法。板紙の上に湿らせた皮を被せ、革が湿っている間に版を押し付けて刻印するという方式自体は従来の型押しと同様だが、広い範囲に高い圧力をかけるためプレス機を使う必要があった。

古くは13世紀からアントワープで使われており、その後各地に広まり1470~16世紀半ばまで主にドイツ-オランダ圏を中心に活用された。モチーフは幾何学模様、花模様、紋章、聖書の一場面、聖人やルター、エラスムスなど同時代の有名人の肖像など様々で、1550年頃を境に一旦廃れたのち1820年代にプレス機の改良とともに復活する。(後述)



Der Psalter mit den
Summarien. D. Mart. Luth
1575年 ライプツィヒ

Wikimedia Commonsより

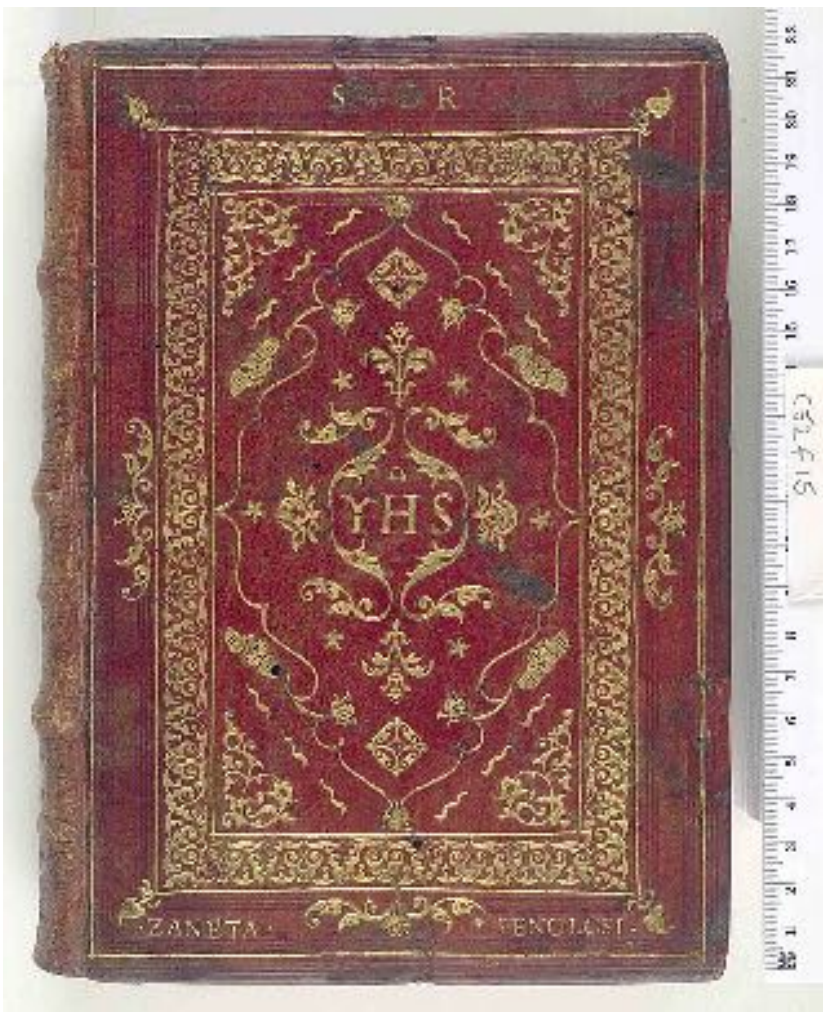
パネル・スタンプによる装丁の作例

https://library.princeton.edu/visual_materials/hb/cases/panelsandrolls/index.html

* 金箔押し

オークション雑誌La Gazette Drouotの記事『C for Cordovan (Gilt Leather)』 <https://www.gazette-drouot.com/en/article/c-for-cordovan--gilt-leather-/16780>によると、革への金装飾はコルドバで11世紀末から行われていたという。ただし古い作例ではそれが金箔押しなのか空押しに金泥を塗布したものか判断するのが難しいため、これをもって箔押し技術が11世紀からあったと断じることはできない。

金箔押しが書物装飾に適用された時期として大まかに推測されている年代は13世紀、イスラム文化圏でのことであったと考えられている。西欧世界にはペルシア(イラン)経由でイタリアに流入した、あるいはイスラム文化の色濃いスペインからナポリ*2に伝わりイタリアで発展したという説がある。いずれにしても西欧に箔押し技術が到達したのは15世紀半ばのことで、遅くとも1470年にはヴェネチアで金箔押しを施した書物が作られている。



*2 ナポリ

ナポリは200年余に渡ってスペインの一部だった時代がある。ハプスブルク家とヴァロワ朝がイタリアの支配権を巡って争ったイタリア戦争(1494-1559)の中でナポリ王国はスペインに征服され、1504年から1707年までスペイン王がナポリ王を兼ねている。

Dominicans Missale ad vsum
fratrum Pre?dicatorum Sancti
Dominici
1550年 ヴェネチア

西洋の古い書物というイメージも根強いが、実際に金箔押しの書物が西欧に登場したのはルネサンス以降ということになる。イタリアとフランスで行われた金箔押し技術が島国イギリスまで伝わったのはようやく1530年代のことで、空押しが隆盛であったドイツでも16世紀半ばまではあまり普及しなかった。一方ハンガリーでは、愛書家であった王マーチャーシュ・コルヴィヌス(在位1458-1490年)*3のもとで早くから書物装飾として金箔押しが採用され、おそらくイタリア人の職人による見事な箔押し本が生み出されている。

*3 マーチャーシュ・コルヴィヌス

マーチャーシュ1世のコレクションは1500~3000冊に上ったと目されている。1526年、モハーチの戦いに勝利したオスマン帝国軍は首都ブダに進駐、コレクションは略奪の憂き目に遭い、散逸した。ハンガリー国立図書館が2018年、マーチャーシュ王のコレクションをウェブ上で再構成するべく立ち上げたBibliotheca Corvinaでは、数々の美しい画像と共にその本の書誌的な情報、コレクションの歴史やバーチャル展覧会など様々な研究成果に触れることができる。

<https://corvina.hu/en/front/>

表紙の画像の一例

<https://corvina.hu/en/diszgaleria/virtual-corvinas/codlat423-en/>

金箔押しの導入以降、各地各時代において多種多様な装丁スタイルが生まれたが、ここでは深入りしない。

* 大型の版によるクロスへの型押し

プレス機の改良とくるみ製本の導入により、製本と装丁が大きな転換点を迎えたのが19世紀初頭のことである。

18世紀以前、小さな花型やロールを組み合わせた一般的なデザインではなく、顧客の家紋などのいわば特注品を表紙に箔押しする場合には、金属製の版と伝統的な木製スクリュープレス機が使われていた。プレスが熱に弱い木製であるため、版を温め直す際にはその都度プレス機から取り外す必要があった。また強度の問題があるためかけられる圧力も限られ、必然的に版自体の大きさも制限されざるを得なかった。

国際印刷博物館(カリフォルニア州カーソン)所蔵の木製スクリュープレス Wikimedia Commonsより



ゲーテンベルク以来の木製スクリュープレスの活躍が300年以上続いたのち、西暦1800年頃に総鉄製の印刷用プレス*4が誕生する。このプレス機は従来の木製・スクリュープ式の加圧方法とは異なり、頑丈な機体とトグル機構のレバー操作によって強い圧力を簡単にかけることができた。

このプレスの登場により、従来のプレス機の倍の面積への加圧が可能となった。印刷速度の面では1時間に平均200枚だったものが250枚になるという程度の小規模な改善にとどまったが、表紙装飾の面での利点は大きく、ひとつの型で表紙のヒラ全体をカバーする広範囲な箔押しが実現した。また機体が鉄製であるため、金属の版をプレス機にセットした状態のままで熱することができ、版の温め直しによって中断されることのない継続的な箔押しや型押しへの道を開いた。

イザーローン私立博物館(ドイツ)收藏のスタンホープ・プレス Wikimedia Commonsより

この新たなプレス機と並んで、1820年台初頭に開発された製本用クロス、そして「くるみ製本」が書物の表紙装飾に大きな変化をもたらした。

それ以前の伝統的な綴じつけ製本では、表紙への装飾は表紙と本体とを接続して全体に革を被せた後に行われる。この方式では装飾に失敗した場合でも表紙だけ取り替えるという訳にはいかないため、大きな版で一度に表紙全体に箔押しを施すのはリスクが大きかった。



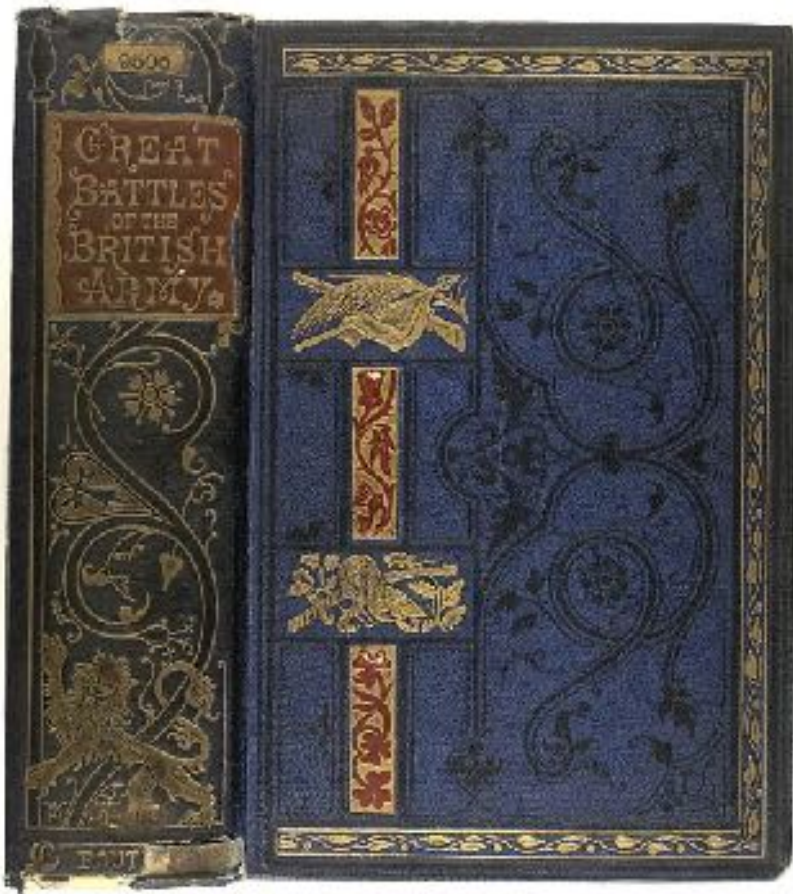
*4 鉄製プレス

開発者である政治家／科学者、Earl Stanhope 第3代スタンホープ伯爵チャールズ(1763~1816)は特許を申請しなかったため、開発された正確な年は分からない。現存している機体で最も古いのは1804年のものである。1806年頃、フレームをより頑丈な半円形に改良したものが作られ、このタイプが19世紀半ばまで製造された。

なおこのスタンホープ・プレスは、オランダ商館を通じて幕末期の日本にも到来した。実際にオランダ語教科書や洋書の刊行に用いられた機体が重要文化財として登録され、現在は東京の「お札と切手の博物館」に所蔵されている。HPの写真を見ると、上記のイザーローン博物館の收藏品よりもフレームが丸みを帯びており、改良型であることが分かる。

<https://www.npb.go.jp/ja/museum/tenji/gallery/stanhope.html>

それに対しくるみ製本では、クロスで包んで装丁まで仕上げた表紙を最後に本体と接続するため、箔押しに失敗した表紙は単に破棄して新たな表紙を用意すればいいことになり、表紙装飾の際のリスクが大幅に低減した。



The great battles of the British army
1896年 ロンドン

Wikimedia Commonsより

その後開発されたスタンホープ・プレスの後続機、インペリアル・アーミング・プレス*5について述べたLionel Darley

『Bookbinding Then and Now』の一文は、この技術と道具と素材の改革がもたらした出版産業の転換についてこう要約している。

「アーミング・プレスが製本業界にもたらした変化は非常に大きかった。くるみ表紙は書物の表紙つけの工程を単純化したし、以前はひとつひとつ手作業で箔押しする革装本にしか見られなかったような凝ったデザインが、クロス装の表紙でも可能となった。またこれにより、表紙作り師と箔押し師、版を彫る彫金師と、新たな仕事の分業化が生じた。そして出版社にとっては、自社の出版物を未綴じや仮綴じではなく本製本された状態で、しかも心地よい外観とお手頃な価格で提供することが初めて可能になったのである」

*5 インペリアル・アーミング・プレス

1830年頃、スタンホープ・プレスと同様のレバー構造とより軽い機体を備えたインペリアル・プリンティング・プレスおよびインペリアル・アーミング・プレスが開発され、製本業者の間に広く普及した。「アーミング」とは表紙のヒラにcoat of arms(紋章)を押す用途から付けられた名称であろうと考えられている。

参考文献

『西洋の書物 エズデイルの書誌学概説』高野彰訳 1972 雄松堂書店

『書物の本』ヘルムート・ブレッサー著 1973 法政大学出版局

『西洋製本図鑑』ジュゼップ・カンプラス著 2008 雄松堂出版

『Bookbinding Its Background and Technique』Edith Diehl著 1946 Dover Publications

C for Cordovan (Gilt Leather) Jean-Pierre Fournet 2020 La Gazette Drouot

<https://www.gazette-drouot.com/en/article/c-for-cordovan-gilt-leather-/16780>

Bibliotheca Corvina

<https://corvina.hu/en/front/>

American Bookbinders Museum

<https://bookbindersmuseum.org/collections/equipment/imperial-press-english-1832/>

HistoryofInformation.com

<https://www.historyofinformation.com/detail.php?id=434>

文化遺産オンライン

<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/169125>

印刷博物館

<https://www.printing-museum.org/collection/looking/54005.php>